

愛知県立大学外国語学部国際関係学科 鵜殿悦子（えりか）教授の 著書『トニ・モリスンの小説』が、日本アメリカ文学会賞を受賞

外国語学部国際関係学科鵜殿悦子（えりか）教授の著書『トニ・モリスンの小説』（彩流社、2015年9月）が、第1回日本アメリカ文学会賞を受賞しました。

この賞は本年度新設された賞であり、当該年度に出版された学会員の優秀研究単著書に対して授与されるものです。本書は、トニ・モリスンの全著作を対象に一貫したテーマの下緻密なテキスト分析を行い、文学作品の新しい読みを提示しました。高度で専門性の高い内容が平明な文章で書かれており、今後この分野の研究において必ず参照されるべき研究書になることは間違いないとして、高く評価されました。

なお本年10月1日に開催された「日本アメリカ文学会第55回全国大会 総会」において、表彰状と副賞の授与が行われました。



<著書 概要>

モリスンの小説テキストを、『物語の枠組み』というフォルム上の観点と『三角形のきずな』というコンテンツ上の観点から分析することにより、フォルムとコンテンツがどのように相互に共鳴しているかを検証している。モリスンの小説にはつねに何らかの『物語の枠組み』が内蔵されている。そのジャンルはおとぎばなし、寓話、民話、映画、小説、歴史、聖書、わらべ歌など多岐にわたるが、必ず何らかの物語の枠組みが存在する。しかしそのあり方は決して顕在的ではない。モリスンの小説では、表面上の物語の枠組みが換骨奪胎され、まったく違う物語へと作り変えられる。

物語のコンテンツはフォルム上の特徴（物語の枠組み）と密接に繋がっている。

モリスンの小説において追究されているのは、社会的な弱者どうしの強い連帯のあり方である。弱者どうしの関係には第三項の存在が介在する。その第三者は、二人にとっては一見何の関係もない、多くの場合「その場限り」の存在であるが、相互的にのみ閉じこもる弱者どうしの関係を再生させ、外の世界へと接合させ、永続的なものへと変容させる働きをする。その過程で、家族、血縁、人種、性等による固定化された繋がりが無効にされ、新しい人と人との関係が起ち現れる。このような弱者どうしの連帯が『三角形のきずな』と名づけられている。このように本書では、フォルムとコンテンツが相互に共鳴するトニ・モリスンの小説の語り的手法とその文学世界の独自性が明らかにされている。

<受賞者略歴>

鵜殿悦子（えりか）：愛知県立大学外国語学部国際関係学科教授

<URL><https://researchers.aichi-pu.jp/profile/ja.0b9be9ada063b571.html>

主催：日本アメリカ文学会（American Literature Society of Japan）

<URL>http://als-j.org/contents_1422.html